

ブータンミュージアム通信

vol. 20

目次

- | | | |
|---|---|-------------------|
| 1 | 私の「福井幸福論」～九頭竜川の若鮎に寄せて～ | 小泉 達哉・・・・・・・・・・1 |
| 2 | 世界にたった一つのブータンミュージアム | 野坂 弦司・・・・・・・・・・3 |
| 3 | ヘリテージのダイナミズム | 向井 純子・・・・・・・・・・4 |
| 4 | 昨今のおおくり運転に思う | 栗原 哲朗・・・・・・・・・・7 |
| 5 | ブータンー口メモ
～ブータンのハーブティとハチミツ～ | 白澤 典子・・・・・・・・・・9 |
| 6 | 最近のクエンセル記事から、その VI
～首相、過去と今後の政治課題を論じる～ | 奥村 彰二・・・・・・・・・・11 |
| 7 | 編集後記 | 河崎 英代・・・・・・・・・・16 |



ブータン・サルパン県にあるゲレフ高校のキャンパス風景

私の「福井幸福論」～九頭竜川の若鮎に寄せて～

小泉 達哉

「福井の幸福について」というお題を頂いた。ブータンとの交流等を通じて「幸福」を本格的に追求されているブータンミュージアム様からのご依頼だけに（はて、何を書こうか）と思案したが、ここは素直に「福井の幸福」を語るうえで今や多くの人々が引用する「全 47 都道府県幸福度ランキング」（日本総合研究所編）をよすがに、私の「福井の幸福」に関する雑感を述べることにしたい。

周知の通り、福井県は 2014 年の第 2 回目のランキング調査から昨年の第 4 回まで実に 3 回連続で幸福度総合評価が全国第 1 位に輝いている。評価の内訳をみると、全国トップの原動力となっているのは、健康・文化・仕事・生活・教育の 5 つの分野のうち「仕事」と「教育」であり、この 2 つの分野は 2012 年の第 1 回調査から一貫して全国トップの評価を維持している。それぞれの分野を構成する高ランキングの指標を総合してまとめれば、福井県は、「仕事」については、「失業が少なく、高齢者に至るまで正規社員として長く働くことができ、新たな技術を生み出す力も高い。」「教育」については、「子供達は不登校が少なく、ストレスの低い状態で伸び伸びと育てられており、学力は抜群に高く、大学進学率も高い。」というものである。こうしてまとめると、その内容は、私が当地に赴任して以来見聞きしたことや私自身のつたない実感とも符合する。ただ、気になることもある。「仕事」については二点。第一は、福井では今や「失業が少ない」どころか、企業の業種や規模に関わらず大変な人手不足である。その深刻度（有効求人倍率）は東京と並んでこれも全国トップクラス。県内の経営者方は、新規採用の困難化、社員の流出、後継者難に頭を悩ませておられる。第二は、福井県の労働生産性が

低ランキングにあること（全国 33 位）。ランキング調査では製造業のデータが採用されているが、私どもの企業調査（短観）によると、非製造業の利益率が製造業よりかなり低位にあることから、非製造業の労働生産性は製造業よりもさらに低位にあると推察される。人手不足を背景にした人件費や物流費の上昇に加え、世界経済の成長に伴う原材料費の上昇がみられる中では、企業の継続性を高めるために、生産性の向上は今や喫緊の課題となっている。

一方、「教育」については、「仕事」分野のように、「良い面もあるが課題もある」という隙が殆んどない。死角がないのである。ただ、高い教育水準の別の効果として、多くの地元の方々からは「高学歴に育てれば育てるほど県外に出て行く者も増えてしまう」という嘆きが聞かれる。全国的に人手不足の中で、心身健全で学力優秀な福井の若者達をどこも放っておかない。親類縁者の影響力・発言力が残る高校卒業時に就職を選択した者達はその約 9 割が県内に就職している。しかし、大学等に進学した場合は、最終的に県内に就職する者の割合は 3～4 割に大幅に低下する。大雑把な試算に基づけば、毎年県内で育った「若鮎」の半分近く（約 3 千人強）が他県に「流れていく」のである。

若者の県外への流出には様々な要因があろうし、県外で活躍されている数多くの福井県人がおられることを思うと、一概に流出の是非を論ずることは適当でない。ただ、福井の「幸福度」を支えてきた大きな要因である「仕事」、言い換えれば「経済」を今後とも維持・発展させていくことは、ランキングの問題を抜きにしても、福井の将来にとって大事な課題である。そのためには、深刻化する人手不足をいかに乗り

越えていくかが不可避の問題となっている。この問題に対しては、既に女性や高齢者の更なる活用、外国人材の登用等が叫ばれている。もとよりそれらの対策も選択肢として排除すべきでないが、私はそれらと同様に、いやそれ以上に大切と思うことは、福井に生まれ育った若者達のより多くが福井を支えていってくれるようになることである。今日の人手不足は単に「労働力」の「頭数」だけを増やせば克服できるものではない。内外の厳しい企業間競争に勝ち抜いていくためには、新しい価値を生み出す開発力や市場を開拓するマーケティング力、生産性を向上させる新たな発想を持った人材が求められ、それこそまさに若者に期待される役割であるからだ。この点に関して、既に県内では、学費を援助する代わりに卒業後一定期間福井での勤務を求める取組みや、福井の企業の素晴らしさを生徒や学生、父兄に実地に伝え体験してもらいキャリア教育等が広がりを見せており、成果を上げつつある。実際に働いてみて初めて分かる福井の魅力もあろう。また、福井の企業の底力を知らないうちに外の世界に出て行ってしまうのは誠にもったいない。そういう意味では、上述のような取組みはとても意義深いことだ。

私は昨年、九頭竜川のほとりで、獲れたての鮎の姿焼きを賞味するという貴重な機会を得た。美しい山々と大河の穏やかなせせらぎに包まれながら、清々しい香りのする新鮮な鮎を味わう気分は格別で、「幸福の国・福井」を実感・

確信したように思う。また、この春先には、九頭竜川に程近い勝山の左義長祭りとお水送りに参加した。そこには、着飾ってお囃子に参加する若者達や、巨大な松明を威勢よく運ぶ若者達など、数多くの若者達がいた。彼らの存在や熱気は祭りや儀式にこの上ない活気を与えていて、私はその姿をみながら何か心に沁み入るものを感じた。そうした福井での様々な体験を振り返るにつけ、この美しくかつ物心両面で豊かな福井がいつまでも平和で幸福であることを願わずにはいられない。そのためには、若鮎が九頭竜川を遡上するが如く、一人でも多くの福井の若者が郷里に集い、その新たな未来を切り開いていくことを願っている。それを現実のものとするためには、私達大人も、若者にとって働きやすい職場作りに一段と取り組む必要がある。「働きやすい」とは、単に勤務制度が整っているとか、職場環境が綺麗ということだけではない。経験は無くともやる気のある若い部下に「やってみなはれ！」と言ってチャンスを与えるような懐と胆力のある上司が風通しのよい職場を作る。会社の問題だけではない。車を持たない大学生や高校生でも手軽に遊びに行かれる駅前街作りも、福井の魅力を高めるためには必要だ。人間（特に若者は）、「質実剛健」だけでは息が詰まる。時には「歌舞伎者」になって楽しむ時間や場所、それをそっと見守る大人の目もなければ・・・。

不埒なよそ者の私だが、微力ながら福井にお役に立てることがあれば望外の幸せである。

小泉達哉氏 略歴。昭和 40 年 6 月東京都生まれ。平成元年 早稲田大学政治経済学部卒業、同年 日本銀行入行。その後、平成 13 年 5 月より経営企画室調査役、政策委員会室調査役、総務人事局企画役、情報サービス局企画役を歴任。平成 24 年 7 月 名古屋支店発券課長、平成 26 年 6 月 文書局管理課長、平成 28 年 8 月福岡支店次長、平成 30 年 5 月 福井事務所長。



世界にたった一つのブータンミュージム

認定 NPO 法人幸福の国 前理事長 野坂 弦司

ブータンミュージアムを福井に開設して早や7年が経過しました。福井とブータンとの交流はその間濃密な関係が続き、ブータンからは数多くの若者や要人が福井を訪問されました。国王代理、国会議長、大臣を始め、研修生、交換留学生などが来られました。国王や首相からのお招きも再三いただき、ブータンでは毎年「福井県の夕べ」を現地で開催し、ブータン政府の大臣、次官をはじめ、テレビ、民間企業の代表者を招いています。そしてブータンでボランティア活動を行っている日本人を招きその場で両国の親善交流を努力して参りました。そのおかげでブータンミュージアムは日本唯一のものとして高い評価をいただいています。

秋篠宮家とブータン国家とのご縁も深く、今年皇位継承第1位と第2位の宮家のお二人と紀子さまが訪布なさいました。そして今度の令和天皇御即位の式典には、ブータン国から国王ご家族をはじめ19名の使節団が日本を訪問されます。私達ブータンミュージアムへもご案内をいただき、ブータン国主催(ブータン国名誉総領事)のパーティにご招待いただき会員が参列いたします。私達は7年間に亘って交流と親睦に努力し数々のご厚意を賜わって参りました。また国王をはじめ数多くのブータン人からのご厚意により、数々の展示品を収集することができました。

現在もブータン人女性3名が福井市内で、研修中で今年中にさらに数名がやって参ります。私達の側では、前知事 西川一誠氏、池田町長 杉本文雄氏、商工会議所会頭 川田達男氏、副会頭 清川肇氏がブータンを訪問し、国王にも拝謁をいただいております。また私達も国王からのご招待や、首相との面談も再三行っております。福井北ロータリークラブとティンブロータリークラブとの交流も長く続いています。

この令和天皇御即位の栄えある年に、私達は長年の活動に鑑み認定NPOの認定をいただきました。そのおかげで法人、個人を問わずご寄付に対し免税の特典がございます。ブータンミュージアムが福井で輝き続けるために皆様のご協力をお願いいたします。

私達の今後の大きな目標が三つあります。

1. 福井県でのGNH国際会議の開催
2. 福井県で日本ブータン学会の開催(来年開催が内定している)
3. 福井県へブータン国王ご一行のご招待

新しい交流がはじまります。令和天皇の世界平和を祈る強いご意志に私達も心からの賛意を表し、これからも両国を中心とした地道な活動を続けて参ります。ご協力に深く感謝いたします。

認定NPO法人幸福の国・ブータンミュージアム・創設者 野坂弦司

パロで開かれた第6回
GNH 国際会議で
ダショー・カルマ・
ウラと寛ぐ筆者
(2015年11月)



ヘリテージのダイナミズム

向井 純子

ヘリテージ

ブータンの省庁などで、「去年のヘリテージ建造物の新築工事プロジェクトは何件だったか?」「昨日、新しいヘリテージ建造物の落慶法要が行われました」などという会話を耳にし、文書を目にします。「ヘリテージ」は日本語では「遺産」と訳され、文化関連の分野では「文化財」とほぼ同義に使われますから、これはおかしな言葉遣いだと思われるでしょう。ヘリテージとは、過去から継承（インヘリット）されるものであって、新しく作るものではないはずで、先の記事は、新しく建てたゾンや寺院のことを指しているのですが、それを「ヘリテージ」と表現するなんて、あの英語の達者なブータン職員たちが言葉の意味を誤って使っているのでしょうか。

一見そのように思ってしまうそうですが、実はここに、ブータンの人たちの文化に対する態度が如実に表れていると思います。寺院はそこにまつわるむかしの高僧や寺宝から福分を受けることができる場所であり、仏像・神像をまつり、村の法要や祭りをを行うスペースであり、ここぞというときには供え物をして祈願し、時には村の集会所にもなる、伝統文化と生活の容れ物なのです。ゾンの中には多くの重要な寺院があり、僧伽が起居して年間数百に及ぶ法要を執り行い、また、多くの場合、行政機能のためのエリアがあります。そして、現在もこうして僧伽と政治の拠点を擁することそのものが、17世紀以来の伝統を、形を変えながら今に伝えているととらえることもできます。ブータンの人たちが、新築の寺院やゾンさえもヘリテージと呼ぶのは、こうした先人から伝えられた伝統や信仰、つまり無形のヘリテージに焦点を当てて認識しているからであり、建物そのものはそれ

らを継承していくための舞台装置にすぎないのです。

こうした態度は、生活者としてはむしろ自然なことだと思いますが、しかし、文化財建造物を建築史的にあるいは芸術的に評価する日本や欧州の一般的な態度とは異なって見えます。ここに、ブータンのゾンや古刹を文化財建造物として後世に伝えていこうとする私たちにとってのジレンマが生じます。容れ物や舞台装置なら、より広くより豪華なほうが良いのですから、古くて暗くて手狭な現存建物を壊して建て替えた、あるいは大幅に改築したい、という許可願いが、そうした許可を所管する文化局に頻りに提出されることは驚くにあたりません。

ザントペルリ

一方で、古い建物のデザイン、古い石壁や木材などからは、多くの情報が得られます。過去の改築の痕跡から古い時代の様式や建物の変遷・発展の過程が考察できたり、昔の施工状況や工程が理解できたり、そして、あまりよくわかっていないブータンの歴史を補完できるものがあるとしたら、それは現存する古い建物や事物をおいてほかにないでしょう。まさに歴史の証人です。

ずいぶん以前のことになりますが、建国の父である17世紀の高僧が創建し、チベット軍との闘いで損傷して、後世に大きく改変されたゾンを調べたときのことです。現存建物に残る痕跡などを調査して、その高僧の作った当初の壁であることが明らかになった、ある石積み壁があります。よろこんで僧伽の高位のお坊さんに知らせ、ブータンで最高に敬われるその高僧が400年前にきっと触ったかもしれないその壁は、



写真1：村の寄り合いのため、お寺に集まった人々



写真2：お祭りを執り行うゾンの僧侶たち

僧伽にとっても重要なものではないかと尋ねました。しかし期待に反してその答えは、確かに非常に大切なものではあるけれども、いつかは滅びるものであり、もしゾンとしての機能を維持向上するためなどに必要であれば、なくなっても致し方ない。そもそもそれを建てた高僧にしても、当時の材料や労働力、技術の制約の範囲で建てざるを得なかったのだから、現在の輸送インフラ・工具などで当時より格段に容易となった材料入手やその加工効率をもって、より立派に作り替えることは、その高僧の意思にも叶う、とも。この世の寺院やゾンは、ザントペルリを模したものであって、機会があればそれに近づけるのが良い。

ザントペルリとは、グルリンポチェの天であり、一般的にはグルリンポチェが中心に座る宮殿の図像で表現されます。

これから

現存建物を見れば、過去の改築や増築の痕を残す物も多いから、時々要請に従って変更が加えられてきたのは間違いありません。それでは、更新の過程そのものを伝統と捉え、現世代が期待するような大規模な変更を加えていいのか、というと、そこは一度立ち止まってよく考えなければなりません。以前は柱を一本取り替えるのも、山に木を探して切り倒し、運搬し、加工するのも人力頼みで、修理に際して材の取り替えはおのずと最小限でした。そうした緩やかな変化の過程が、現代では過去には考えられなかった規模で可能になりました。例えば全部の木材を取り替えてしまうような変更を、伝統の延長上に位置づけることはできません。一方で、僧伽が生活し日課が営まれ、地域の人たちが誇らしくも畏れもして集う空間のダイナミズムに、異なる文明においてむしろ伝統が失われつつある過程で発展したともいえる「文化財保存」という思想をそのまま当て

はめることは現実的でも適切でもありません。

いま、「価値に基づいた保護」という掛け声で、建物の詳細調査に基づく文化財的価値づけによって、保存すべき部材・部分や改変してもいい部材・部分などに色分けし、また、ある程度所有者の自由に任せる部分を設定するなどして、文化財保存のコンセプトと文化のダイナミズムのバランスを探る試みをしています。同時に、なにをどういった理由で、どの程度・範囲の変化を許容していくことが、有形・無形の文化の総体としての建造物を本当の意味で後世に伝えることになるのか、みなで考えていかなければなりません。なかなか困難ですが、こんなブータンの挑戦は、世界に向けた問題提起でもあります。皆さんも身近な文化財建造物について考えてみてください。それはだれにとってなぜ大切なのですか。どのような形で次世代に残していくのですか。

向井純子氏の紹介

福井市生まれ。2001年から5年間JICAボランティアでブータン王国内務文化省文化局に配属。2008年から8年余り同省技術職員として勤務しブータンの文化財建造物保護行政に従事。現在も同省からの業務委託や国際機関等による派遣により、同国の文化財建造物の保護に係る業務に携わる。

昨今のあおり運転に思う

認定NPO法人幸福の国（ブータンミュージアム）
事務局長&副理事長 栗原 哲朗

筆者の私も車を運転し始めて、かれこれ約40年。私の住む福井市は、電車、バスなどの公共交通機関が都会のように整備されていないため、他の地方都市同様、車依存社会である。多くの家庭には広めの駐車場があり、一家庭に少なくても2台、多いところでは3台から5台の車を保有している。こうした地方都市では、通勤、買い物、病院通い、子供の送り迎えなどにも車は必要不可欠なのである。既に退職した身の私も、合唱の練習やボランティア活動などのため、車を運転しない日はまずない。

ところで、車を運転する際、私事で恐縮だが、私は日ごろ以下のようなことを心掛けている。

1. 死角や四ツ辻からは、いつ人が飛び出してくるかわからないという想定で運転する。
2. 自分より早い速度で背後から迫ってくる車にはできる限り道を譲る。
3. 信号は当てにしない。自分の進行方向の信号が青になっても、左右を十分確認して進む。
4. 車線変更をする際は、まず、ウインカーを2、3秒点滅させ、右背後の車が入れてくれそうな気配の時に徐々に車線変更をする。
5. 相手の車が左右いずれかのウインカーを点滅させて、自分の前の走行車線に侵入してくる場合、こちらが減速し、快く入れる。（そのお礼に、相手の車が1、2秒ハザードランプを点灯することが多い）
6. 指定速度あるいは、出しても+10 km未満の速度で走行し、道路の交通量や状況に合わせた速度で運転する。狭い生活道路では、いつでも止まれる速度で走る。

7. 他人を乗車させているとき、運転に集中するため、なるべく必要以上の会話はしないように努める。
8. 前方の信号が黄色、赤になっているのが見えたら、あるいは車が停止しているのが見えたら、アクセルペダルを離し、自然に減速するのを利用し、停止する場合、2、3回のポンピングブレーキを踏む。
9. 自分の車の左右前後の車、あるいは対向車はどういう性格の人が運転しているかを把握しながら運転する。
10. 路地などの狭い十字路、T字路で右折する場合は、減速し、なるべく直角に曲がるようにする。
11. 駐車場などから走行車線へ入るとき、あるいは側道から本線への合流地点で走行車線へ入る時は、雨が降っていても必ず窓を開けて手を上げ、会釈して、相手の同意を得て、その流れの中に入る。

こうしたことに日ごろ注意しながら運転しているのだが、お陰様でこの40年間、無事故・無違反である。このことを自慢するつもりは毛頭なく、この先、1回でも事故を起こしたら何の意味もなくなるのである。いつも初心に帰り、運転の怖さを肝に銘じつつ、「上手な運転とは、目的地に早く着く運転ではなく、事故を起こさない・事故にあわない運転である」と心の中でいつも自分に言い聞かせている。

ところで、運転をされる方ならだれでも日ごろ感じておられるだろうが、運転をしていると、自分の周囲の車の運転手がどのような性格かが如実に伝わってくるものである。特に車はア

クセルさえ踏めば、直ちにスピードが出るため、そのスピードの出し方で運転手の性格がある意味、増幅されてはつきりと表出するのだ。せっかちな人、自制心のない人、公共心のない人、自己中人、気が強い人、思いやりのない人、品のない人、落ち着きのない人、分別のない人、そしてそれらとは逆の性格の人などなど。運転する際は、こうしたいろんな性格の運転手がいることを十分自覚して、その場その場に合ったベストな運転を選択しながら安全運転に努めることが、車での事故防止のためには不可欠だと思う。

さて、最近、TVなどで、あおり運転のニュースを頻繁に耳にする。統計的にどうなのかは把握していないが、あおり運転の件数やその悪質度は上昇しているのではないだろうか。その背景には、いろいろな原因や理由があるのだろうが、悪ふざけや遊び感覚でのあおりを別とすれば、その多くは、**お互いを思いやる**ところが欠けてきていることに起因しているのではないだろうか。**思いやりの精神、譲り合いの精神、助け合いの精神**があれば、あおり運転の多くは無くなるのではないだろうか。そもそも、あおり行為に限らず、今日、社会では様々な悲惨な事件が起こっている。経済的には豊かになってきているはずなのに、こうした悲惨な事件は一向に減る気配がない。その背景には、激動する社会、また、仕事や勉強や時間に追われたスーパーストレス社会の中で、いつのまにか我々の心には余裕が無くなり、ところがとがり、とげとげしく、ぎすぎすとし、その結果、人間がぶつかりあうことが日常的になってしまったのではないだろうか。

ところで、たまたま、去る9月11日付の福井新聞の「心のしおり」欄の中で、本県の越前市円正寺住職 一峰舜円氏が次のような歌を紹介している。江戸後期に活躍された木喰上人（もくじきしょうにん 1718年-1810年）の

歌で「まるまるとまるめまるめよ我が心 まん丸丸く丸くまん丸」（以下、舜円氏の文章から）素朴でほほえみをたたえた「くしゃくしゃ」の仏像を彫り続けられ、その庶民的な仏像は木喰仏（もくじきぶつ）とも微笑仏（みしょうぶつ）とも呼ばれて親しまれています。90歳を過ぎてなおほほ笑む仏像を彫りながら、「心は常に丸くもって、笑顔を忘れないように」と万民の幸せを願い、全国を遊行された偉いお坊様でした。私の里の近くには日野川が流れています。河原に下りてみますと、丸い玉石がたくさん並んでいます。上流では荒々しい角岩であったのですが、屈曲した河川にもまれて、優しい玉石になりました。（以上、舜円氏の文章から）そして、同氏はさらに木喰上人のもう一首を紹介されている。「**みな人の心を丸くまん丸にどこもかしこも丸くまん丸**」

人間一人ひとりがこのような丸いところをじっくりと育て、お互いを思いやり、譲り合い、助け合えるようになれば、みんな幸せになれるのではないだろうか。そして、あおり運転などということもなくなるのではないだろうか。子どもへの虐待、子供同士のいじめ、無差別殺人、親族殺人などの悲惨な事件もなくなるのではないだろうか。狭い日本、そんなに急いでどこへ行く。まんまる丸い心で、ゆったりのおんびり、楽しく生きようではないか！！

ブータンミュージアム内でも
「グーズベリーティー」という
ビタミンC豊富なヒマラヤグーズベリーを
使ったハーブティーを販売しております。



2018年9月、日本で初めてブータン産ハチミツの輸入、販売を始めたという記事が新聞（財経新聞）に載りました。日本でのハチミツの自給率は7%（2014年）で、輸入されている75%が中国産です。大気汚染や農薬汚染の影響のない安心して使用できるハチミツを提供したいという思いから、この度販売されたのがブータンのブムタン地方（中央ブータン）ジャカルで作られている100%ピュアなハチミツです。ブータンの豊かな自然の中でホワイトクローバー、ブッシュベリー、マスタード、リンゴなどの野生の花々から生み出されました。

原材料としてのハチミツは、輸入する際80℃以上で加熱しなければならないのですが、製品をブータンから空輸することで、非加熱のまま届けることが出来ました。非加熱処理を行っているため、酵素や栄養分が破壊されず生きたまま含まれていて大豆や味噌の30倍のグルコン酸が含まれているということです。

自然からの贈り物「ハーブティー」と「ハチミツ」。日本国内でお取り寄せも出来ませんが、ブータン旅行のお土産としては最適です。



最近のクエンセル記事から、その VI ー首相、過去と今後の政治課題を論じるー NPO 法人「幸福の国」 副理事長 奥村彰二

昨年の 9 月の総選挙で、一般の予想を覆して、現在のロティ・ツェリン首相の率いるドゥク・ニヤムル・ツォクパ (DNT:協同党) がブータンの政権を執ることになった経緯は、本誌の前号で述べた。この政権交代が起こってから、丁度 1 年が経過したが、政府は、選挙中に公約また誓約として国民に訴えたこと、あるいは、それを文書としたマニフェストとして書かれていることを、実際の政治において速やかに実現しようとしている。たとえば、公約の一つとして、国民の間の様々な格差をできるだけ小さくすることを挙げていたが、この 6 月の始めに政府は、全公務員職員の給与改定を提案した。そこで、これまで比較的高い基本給与を貰っていた職種の給与上昇率は、比較的低い基本給与を与えられていた職種の職員より、給与上昇率を低く抑えられた。政府は、これにより俸給における格差是正が進むと発表している。

首相はこれまで、医者や教師を辞めて、政治に参加したのは、国民が受ける無料の医療サービスを受ける国民の間に大きな不平等があったからであると、再三述べてきた。また、国の基本的学校教育システムの改革として前政権が導入したセントラル・スクール (CS) は、従来の学校の間で、国からの人的資源および経費支援に大きな不平等が生じているとして問題視されてきた。昨年 9 月の調査で、ブータン全土で公立、私立の学校に通う生徒数は、167,799 人で、CS に通う生徒数は、50,309 人であった。すなわち、ブータンの学校に通う生徒の 30% が、CS の恩恵に預かり、残りの 70% の生徒は、従来の学校にそのまま通っていることになる。

ロティ・ツェリン首相が、前日の議会で国の現状報告を行ったことが、2019 年 6 月 27 日のクエンセルのトップ記事となっている。その記事のタイトルは、「われわれは、正しい道を進んでいるか?」である。ブータンが憲法を制定し、過去 5 年ずつ 2 つの政権によるブータンで初めての議会制民主政治が行われて、現在自分が政権を引き継いでいるので、まず、その過去の政治がどうであったか、正しい評価をしたあとで、その政策を引き続いて継続するか、しないか、その判断が迫られている。正しい政策を選択するために、これまでの政策とその価値観を正しく評価することが大切である。

「ブータンは、特に難しい課題のない、幸せな国として、しばしば紹介されている。ブータンの民主的な進展によって、国民は最良の恩恵を受けることができたのだろうか? ブータンはもっとうまくいくことができなかったのだろうか?」という問いかけで、報告は始まっている。またこのメッセージが、報告の基調的な考え方として、書かれている。とにかく、ブータンがこれまでとってきた政策を、正確に評価しようと語りかけている。

これらの文に続く首相の報告の記事には、ブータンの重要な情報が含まれているので、日本語に翻訳して、そのまま以下に引用したい。ただし、文章をより理解し易くするために、最後に、筆者が新たに注釈を付けるとともに、記述内容が重複している文章を削除している。

「私たちは正しい進路上にあるだろうか、今こそ私たち自身に問いかける時です」 国は未来に向かって進むために、過去を正しく認識し、現在を深く考察しなければならないと、首相は付け加えた。

首相はこの報告を、過去の行動、現在の状況、そして今後の進路の3つの部分に分けて提示した。

懸念事項

過去を振り返って、首相は国が後発開発途上国（LDC：Least Developed Countries）¹⁾のグループからの離脱に近づいていると述べた。「それは発展の兆しではありますが、ドナー国からの限られた政府開発援助で、さらに前進し続けることには、まだ大きな課題があります」と首相は述べた。

無料医療は、質の高い医療とタイムリーな診療を保証するものではない。「私が政治に参加するために、医療の仕事を辞めたのは、無料医療について国民の間で、大きな不平等があるからです」と首相は言った。

今日、10,000人のブータンの人々ごとに、平均3つの医療施設がある。人口の約96パーセントの人々が、徒歩2時間圏内にある医療施設を利用できる。「これらの施設のほとんどで提供されている医療行為を向上させるためには、まだ多くの改善が必要です」と首相は述べた。

首相はまた、過去5年間に照会された医療²⁾のために約8億ヌルトラム以上のお金が費やされたと述べた。

教育は医療に似ていると首相は述べた。無料の教育制度は評価されているが、あらゆるレベルでの教育の進歩により、毎年より多くの求職者が求人市場に参入している。毎年市場でのスキルがなくても就職市場に入るまでに、16歳ぐらいの若い子供たち、平均して約1,500人が、普通の学校教育および職業技術教育の学校から、クラス10の過程を修了して、求人市場に必要とされている十分な技能を持たずに参入して来る。

国は若者の識字率が93%以上であることを誇っているとしても、それが有効な雇用につながらなければ、無料教育を与えるメリットを疑問視せざるを得ないと、首相は述べた。

仕事がない状態は、経済が不安定であることの兆候であると、首相は言う。「私たちがLDCを離脱する資格は、社会的指標にも基づいています。私たちは離脱の判定に関連のある二つの調査で、経済的脆弱性指数の条件を満たしていない」と首相は言った。

経済のバックボーンとして捉えられてきた水力発電もまた徹底的な検討が必要である。彼は、水力発電の資金調達のために、国の公的債務が2,100億ヌルトラムに達したが、そのうち水力発電の借入金は、1,540億ヌルトラムであると述べた。

「水力発電所建設のためのローンは自己精算ローン³⁾であり、それがリスクをもたらすことはないという主張を多くの人が信じています。ローンはローンだと、私は思いますし、現状に自己満足して、のんびりしていたり、無関心である場合ではないと思います」

首相によると、市民の食料の半分以上が輸入されており、年間50億ヌルトラム相当のコメの輸入は、驚ろくほどの多さだという。ガサでの例を挙げて、政府が大量に種子を供給しているにもかかわらず、農民は期待どおりの小麦を生産することができなかったと彼は言った。これは、収穫期日前の小麦苗を、馬に食べさせたためであると彼は言った。ティンプーのカピサ地区で、かなりの量のコメ生産の数字が発表されているが、実際にはほんの一握りの水田しか栽培されていない。

観光産業では、「価値は高く - 量は少なく」という政策とは対照的に、結果的に成功の結果を出している。

「政治腐敗、限られた資源の管理ミス、無駄な支出などが、一日おきにメディアで報告されてい

る。私たちは倫理と市民としての責任について、正しくやってきたか？ 長年にわたる経常予算の増加は、システム効率の向上をもたらしたのだろうか？」と、その報告は述べている。

首相は、事実は過去の政府を弱体化するものではなく、現実を考察するためのものであると、明言した。「過去の政府は、その任期中に関連した適切な計画を作った。これからの政治の違いは、その関連性と必要性は、その時の状況によって動的に変化させることにあります」

彼は、国が国家として長い道のりを歩み、すべての面で多くのことを達成したと述べた。しかし、すべての努力にもかかわらず、現在の状態には、問題と困難な課題がない訳ではないことを、国は理解しなければならないと、彼は言った。

ずっと先に

首相は、現在の国の状態における議会を更新し、持ち込んだ新政府と優先部門を改革した。報告はさらに、教育、保健、環境、文化、外交政策、経済、政治、女性、子供など、さまざまな部門に分けられた。

問題の1つは、計画予算の充当であり、それは計画期間の最終会計年度に向けて、予算の大部分が配分される傾向になっていると彼は言った。「これは政権与党が、将来への政治的な特典を得て、結果的に予算の無駄遣いとなる間違った使い方となる可能性がある」と彼は言った。第12次計画では、昨年の財政年度に対しては、予算の一部しか割り当てられていないと述べた。

また、計画の実施を再調整する時が来たと述べた。「政治と計画作りのプロセスを変える迷路の中で、私たちはひとつの国として前進するための総合的なビジョンを必要としています」と彼は言った。各々の開発計画の所有権は、選挙で選ばれた政府に任されるべきであると彼は述べた。

「問題は、退陣する政府が計画を策定し、新政府がそれを実行しなければならないことにあります」と首相は言った。さらに、「それは全体的なビジョンが失われるからです」と付け加えた。政策は継続性を維持しながら、当時の政府に独自の計画を立案する権限を与えるように策定されるであろうと彼は述べた。

来年、政府は「価値は高く - 量は少なく」という先見の明のある観光政策を復活させると、首相は述べた。

政府はまた、受胎の日から約3年間、母子の世話と栄養を確保しようとする運動「金の1,000日プログラム」の一環として、来年、母乳手当を導入する予定である。

「私たちが立てた医療重点計画の大切な構成要素として、一次医療施設²⁾が強化されるので、内視鏡検査と超音波サービスを求めるすべてのブータン人は、受診者のゾンカクやゲオの範囲を超えて移動する必要はない」と報告は述べている。

子宮頸がんの撲滅という公約に従って、年末までに政府は、すべての女性が定期検診の一環として、検査手続きに子宮頸がん検査を受けられるようにする。

外交政策については、ブータン人の海外在住者が多いことを踏まえ、政府は少なくとも1つの大使館または領事館を設立し、2カ国との外交関係の構築について調査すると報告書は述べている。オーストラリアとの特命大使任命の提案は現在検討中である。

デジタル・ドゥキュル⁴⁾については、効率的で効果的な医療サービスを強化するために、電子患者情報システム (e-PIS) をデジタル化するだけでなく、脱税を防ぐために税務管理も電子化する

と、首相は述べた。

来年政府は全国のすべての世帯と機関に、3色のごみ入れ容器を配布すると、首相は述べた。

時代の変化に対応し、法律を現実問題と直結させるために、政府は出訴期限法の制定を開始し、効率化のために、法廷で既存の権利を主張できる期間を規定する、と彼は述べた。

今年中に女性と子供を支援するために、NCWC（国家女性と子供審議会）法案が開始されるであろうと、報告書は述べた。

「政府はまた、薬物乱用者を刑務所ではなく、リハビリテーション・センターに送るように、麻薬、向精神性物質および薬物乱用法を改正するであろう」と首相は述べた。

行政訴訟に対処し、裁判所の負担を軽減する行政審査法案を起草する作業を開始する計画もある。報告書には、この関係で現在 98 の法律が施行されていると記載されている。すべての整合性と関連性について検討され、必要に応じて修正が提案される。

政府はまた、地方自治体、中央機関、その他の団体間で役割と責任を明確にするために、地方分権化政策の承認と実施の開始を計画している。

すべてのゾンカクにおいて、ジェンダーを考慮した洗面所の設置も改革案にある。

政府はまた、今後 5 年間で一人当たりの GDP を 4,500 米ドル以上に引き上げることを目指している。

首相は、食料の自給自足を確実にすることが農業省の主な目標であると述べた。「少なくとも、国内の地方で生産できる品目の代替品の輸入を目指す必要がある」

旅行業界では、政府は全国で観光を促進するための取り組みは推進するが、大量の旅行業は奨励していないと述べた。

「水力発電は引き続き優先事項となるだろう」と首相は述べた。しかし、政府の現在の注目点は、進行中のプロジェクト⁵⁾を完了することであり、それからサンコッシュ貯水池発電所が、彼らの任期中に完成するのを見ることを、熱望していると言った。

活気に満ちた起業家精神にあふれたエコシステムを起ち上げるための完全な自治体組織の新規事業センターが設立されるだろう。CSI（小住居や小規模産業の開発事業）については、主力製品が 20 種の輸出用の CSI 製品のものであり、1,050 の事業体の支援をして、さらに 4,700 人の追加雇用の創出を目指している。

政府は、デジタル・ドキュメント・主要プログラムを通じて、公共サービスを便利で簡単に利用できるようにするために 25 億ヌルトラムを割り当てた。

参加するための明確な手段を提供することによって、それが繁栄するのを助けるために、政府は民間部門と協力すると言った。今後のブータンの革新的変革経済フォーラムは、同国の投資環境を拡大するためのプラットフォームとして機能するであろう。

筆者による上記の記事に対する注釈

- 1) 後発開発途上国 : Least Developed Countries (LDC) の日本語訳であり、国の社会・経済の発展状況を判定するために、国連がその判定基準を決めて、世界の国を分類したときの一つのグループ名である。現在世界の LDC は、47 カ国であるが、2023 年ごろまでには、バヌアツ、アンゴラ、ブータンが、この仲間から離脱すると見なされている。

- 2) ブータンにおいて、高度な医療技術を伴う診療は、ほとんどティンブーにある国立総合病院（JDWNRH : Jigme Dorji Wangchuck National Referral Hospital）で行われている。ティンブー以外に住んでいる人は、最初に一次医療施設（Basic Health Unit）と呼ばれている地域の病院で診療を受け、より高度な医療が必要と判断された場合、JDWNRH を照会してもらい、そこでの診療を受けるのが一般的である。
- 3) 自己精算ローン : self-liquidating loan は、購入に使用された資産によって生成されたお金で返済される短期または中期のクレジットの形式のローンである。自己精算ローンの返済スケジュールと満期は、完成した資産が収入を生み出すと予想される時期と一致するように調整される。これらのローンは、迅速かつ確実に現金を生成する購入物件の資金調達を目的としている。発電所が完成したとき、水力発電所を作るために借りたお金は、約束したようにそこで発電した電気をインドに送って、借りたお金を清算するので、ブータンの懐は何も痛まないと考える人のことを言及している。
- 4) デジタル・ドゥキュル : Digital Drukyl は、第 12 次 5 年計画において、オンライン上で国民に対する各種公的なサービスを大きく発展させるために、ブータンの情報通信省が、本格的に実装しようとしている情報システムの名称である。このシステムを実現するためには、ブータン全土にこれまでより高速で安定したネットワークを構築する必要があり、厳しい山岳地帯に住む人々の不便さを、一挙に解消しようとする大規模な計画である。
- 5) ブータンの建設中の 3 つの大型水力発電プロジェクト、マンデチュー・プロジェクト、プナツァンチューー-I とプナツァンチューー-II のプロジェクトは、その建設完成が大幅に遅れている。特に、プナツァンチューー-I については、2008 年 11 月から建設が始まり、2016 年 11 月には、工事完了となっていたが、その後、工事の問題点が次々出てきて、今では完成予定が 2024 年とされている。建設コストも予定の 3 倍と膨らみ、最近、政府と野党の議員から工事自体を止めることを検討すべきという意見が出されている。また最近これらの発電所の建設に伴う大規模な自然破壊、特に送電線の建設による森林破壊が深刻であることが明らかとなり、ブータンの森林保護の法律に問題があることも指摘されている。

編集後記

暑い夏がようやく終わり、さわやかな初秋を迎え、夜にはこおろぎの鳴き声も耳にする今日この頃です。近年、自然災害による被害が増加しております。被災された方には心よりお見舞い申し上げます。

五月には元号が令和に変わり、新しい時代の幕開けに心が弾みました。十月には令和天皇の即位の礼が挙行されます。国内外から多くの方がお祝いに来て下さるようで、そのなかにはブータンの国王ご夫妻もいらっしゃいます。令和の時代が平和で長く続くことを願うとともに、ブータンと日本との友好関係が長く続くことをお祈りいたします。

さて、今年は亥（イノシシ）年。先号の編集後記で、ブータンにも日本と同じく干支があるのをご紹介いたしました。資料によってはイノシシと書いてあったりブタと書いてあったり、結局どちらなのか断定できなかったため、ブータンの方に直接確認することにいたしました。結果は今号の編集後記にてお知らせいたしますと宣言しておりましたので、早速発表いたします。

ブータンの今年の干支は「雌の大地の野ブタ」。

やはりブタが正解だそうです。イノシシとブタとの間にどんな争いがあったのか気になるころではありますが、ブータンの干支はブタであると、今後は自信をもって PR していきたいと思います。

日本人にとって大切な節目となった 2019 年。ブータンミュージアムも大きな節目を迎えました。今年 8 月、認定 NPO 法人の認定をいただくことができたのです。特例認定 NPO 法人よりもさらに審査が厳しく、これまで福井県では認定 NPO 法人の認定を受けている団体は 3 団体しかありませんでした。ブータンミュージアムが 4 団体目として認定を受けられたのは、皆様の応援とご協力があったからこそ。心より感謝いたします。

認定 NPO 法人として、今後もブータンと日本をつなぐ懸け橋として精力的に活動をいたします。引き続き応援くださいますようお願いいたします。

残り少なくなってきましたが、2019 年が皆様にとって、思い出深くすばらしい年になるようお祈りいたします。

ブータンミュージアム 河崎英代

【発行日】 2019年10月10日

【発行元】

認定 NPO 法人 幸福の国

〒910-0005 福井市大手 3-15-12

TEL: 0776-22-0011 FAX: 0776-22-0010

ブータンミュージアム

ホームページ <http://bhutan-npo.asia/>

Eメール info@bhutan-npo.asia

定休日 月曜日

開館時間 11:00 ~ 17:00



JR 福井駅から徒歩で約 10 分